慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウイーかノンか。：日本舊石の存在
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.80- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウイーかノンか。（日本舊石の存在）

過日リユサン師來朝に對つて、親しく其人にも接し、且つ其講演に當つては、清々しい松本先生の御邦譯を拜聽して、耳底に其餘韻まだ消へやらぬ所に、前號先生の御印象を讀んで、懷しの餘り、かく筆を執つた。勿論拙文よく其意を盡すか、蛇足は覺悟の前。リユサン師の言葉の樣に、日本に舊石あるか否か、額に筋立てゝ議論立てするのではないが、一通りの說明？を申しあげ度。これも私共の職業意識から、私共の方でも、大切に考へて居ることを、ムザ〳〵外國の人々に占めらるゝのも、心外であり、又一通りは心得ても居りますと云ふに過ぎない。只問題が主としてチアンスにあるから、何時、誰人が發見し得るのかは、豫想し得ない點だけを、こゝに御諒解願へれば、それでよい。今時史前學者によつて、發見せらるゝ遺跡、遺物の類は、自から山野を駈け廻つて、採集し、發掘調査するにしても、地表面か、斷面上かに何等か痕跡手掛りが發見せられない以上、今日の科學？では、地中のことは、表面からは解らない。それ以上は第六感か千里眼ででも無ければ、洞察し得ない。從つて發見と云ふことは、偶然の出來事に過ぎない。まして舊石などは、其實在時期が攸久の過古であるから、今日までの經過中、多くの自然變異も受け、且つ其上には厚い覆土に覆はれてしまう。これを表面から見つける方法は、不幸にしてない。獨り日本ばかりではない。西洋も支那でも同じことである。只洞窟の樣な、ある限定範圍に於ては、試掘も出來る。特に氷河時代の樣な寒さの時は、原人が住み易い。それ故、舊石存否研究に對し、洞窟試掘も一手段であり、これは私共も、內地でとつくにやつては居るが、殘念なことには、舊石が、をいそれと出てくれなかつたのである。あとの一手掛りは、河岸の洪積段丘の搜索であるが、日本の段丘は、松本先生などがプロメナード召した、セーヌ等のテラスとは、成立を異にするものがあるから、これも同一には出來ないし、シエルやアミアンの樣な砂礫坑も無いから、堀つて見るには大掛りである。從つて最初の發見なるものが、どの位學術的に價値づけらるゝものか、一本の糸で大平洋の魚釣りと申さば、叱られもしようから、古生物學上の化石發見と略同樣と申度。然しながら日本舊石肯定論も、中々多い。只地中の未知に屬するから、多く云はないだけである。玆に私をして忌憚なく云はせて戴くならば、舊石狀石器の存在は、確に認めもするが、果して眞の舊石が日本に存したかは、疑問に思ふ。もし舊石存在を認むるにしても、それには條件がつく。舊石當時、日本諸島は今日と異り、大陸との間に、舊石人と雖も、容易に渡り得る地形を有したにあらざれば、舊石人は斷然渡つては來られない。但し舊石の考へ方次第で、Epipalaeolith, Pan-Palaeolith, Post-Palaeolith等頭に字のつくやつは、御免を被る。眞の舊石人に就てのことである。もうこの位で止めて置う。あまり書くと熱が出る。而して最後に再び、松本先生の御心配に對し、謹んで敬意と謝意とを申上げる。

（昭和六、二、九、雪の朝、大山　柏）